法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-25

下斗米伸夫教授定年退職記念号に寄せて

和田, 幹彦 / WADA, Mikihiko

(出版者 / Publisher)
法学志林協会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法学志林 / Review of law and political sciences
(巻 / Volume)
117
(号 / Number)
3・4
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2020-03-24

下斗米伸夫教授定年退職記念号に寄せて

法学部長　和　田　幹　彦

下斗米伸夫先生は、一九八八年に法政大学法学部に教授としてご着任されました。以来、二〇一九年三月末日をもって我が学部を定年退職されるまで三一年にわたり、ご専門である当時のソ連から後のロシア（旧ソ連諸国）の近現代政治史・政治学を中心にご研究を進められ、輝かしいご業績を残されました。同時に学部生・大学院生の教育、さらには学内行政においても法学部長職も含めて、多大なご貢献をなさったことも特筆に値します。

先生は、一九四八年に札幌にお生まれになりました。一九六七年の東京大学入学時に、第二外国語として当時は学習者が少なかったロシア語を選択なさったことが、その後の研究者としての選択に大きな影響をもたらした、と先生ご本人が語っておられます。一九七一年に東京大学法学部をご卒業と同時に、同大学の大学院に進学され、ソビエト研究の第一人者であった溪内謙教授のご指導の下、研究を始められました。二年後には修士号を取得されましたが、この時の修士論文については、後述させていただきます。博士課程に進学なさった後、一九七五年から一年間、文部省による留学で、ご本人いわく「組合の研究所とモスクワ大学寮に落ち着く」ことができ、学問では最大の公共図書館レーニン図書館が利用できたことが非常に研究に役立ったそうです。

ご帰国の後は、早々と一九七八年に博士課程を修了され、法学博士号を政治学の分野で取得されました。その時の

博士論文は、四年後に堂々と東大出版会から『八二年ソビエト政治と労働組合――ネップ期政治史序説』として公刊され、そのレベルの高さで日本のソ連研究学界を驚かせました。

同年、一九七八年には早くも成蹊大学法学部に講師としてご就任されました。同大学在任中には、一九八三年から二年間、イギリスのバーミンガム大学ロシア東欧研究センターで客員研究員として研究をお進めになりました。ご帰国された一九八五年には成蹊大学法学部で教授に昇任なさっておられます。

そして一九八八年、我が法政大学法学部に、比較政治ご担当の教授として就任してくださいました。その後は、新たに発見された資料・史料にも基づくご論文を次々と公刊され、その洞察と鋭い分析は国内外の学界で高く評価されました。また、一九九二年から二年間は、ハーバード大学ロシア研究所客員研究員となられ、その間には一九九三年にウィルソン・センターの招請研究員も務められております。ご帰国後に、一九九八年から三年間、朝日新聞客員論説委員として活躍されたことは、読者の皆様にもよく知られているかもしれません。下斗米先生ご自身も、「論説委員としてロシア関連社説の下書きや論評を書いたことは、学会の枠に閉じこもりがちの学者にはいい刺激となった」とおっしゃっておられます。国内での学会活動として特に注目すべきは、二〇〇二年から二年間、日本国際政治学会の理事長をお務めになられたことであり、日本の学界に大きな貢献をなさいました。

下斗米先生のご専門は多岐にわたります。私は専門ではありませんので必ずしも正確に理解しているとはいえないかもしれません。しかし、その中でも注目すべきは、当初の修士論文として取り組まれた、ソビエト初期政治史上の大論争であった労働組合論争というテーマです。このご論文を完成された下斗米先生は、博士課程に進学したものの、この時の史料不足を実感なさり、その修士論文を二〇一七年まで公刊されませんでした。モスクワやボルガに強固な古儀式派（ラスコリニコフ）という宗教的異端派と労働問題の関係を、先生は今世紀になって改めて注視なさり、当

時の修士論文を「完成」なさったのが、本誌『法学志林』に掲載され、後に『神と革命』（筑摩選書）、二〇一七年に所収されたご論文です。

博士論文以後は、長年にわたり、一九三〇年代のスターリン時代の本格的な研究に従事されました。また一九八〇にポーランドで自主管理労組が生まれ、朝日新聞に乞われて、市民社会と党の狭間の組合の苦悩といった角度からこの運動を慧眼を以てご支持されたご論文も執筆しておられます。この直後に、一九八二年前後モスクワの短期の史料収集に赴かれた際に、スターリン時代一九三二年の北カフカスで飢饉がおきていたことを示す地方党内秘密文献を発見なさって発表されたご論文がきっかけで、下斗米先生のご研究は世界的にも知られるようになります。

こうしてスターリン時代研究を進められた下斗米先生に転機が訪れたのが、一九八五年のゴルバチョフ政権誕生直後に短期ながら、ペレストロイカ初期にモスクワに滞在なさったことでした。それから六年後のソ連崩壊に至る過程で、下斗米先生はソ連の歴史研究から、ロシアと元ソ連諸国の現代問題を分析される研究へと進まれました。その間も、ソ連の研究は続き、中でも東大出版会から一九八七年に公刊された『ソ連現代政治』はベストセラーとなりました。その後のペレストロイカ研究は、いくつものご論文に結実されています。特筆すべきご著書は、一九八八年の『ペレストロイカ』（岩波新書）、一九九〇年の『「ペストロイカ」を超えて』（朝日新聞社）、そして一九九二年の『独立国家共同体への道』（時事通信社）であり、これは学界では富に有名であるがゆえに「三部作」という呼称すら付いております。

前述のハーバード大学からご帰国後は、改革の矛盾を見据えたロシア論、旧ソ連地域論を研究なさいました。この間、ロシア・旧ソ連改革については一九九二年に『独立国家共同体への道』、一九九八年には東大出版会から『ソ連現代政治』を大幅に書き直した初めての『ロシア現代政治』、そして筑摩書店から『ロシア世界』を上梓なさり、「ソ

連学」と切り離された時点での「ロシア学」の体系化を実現されました。

その後、二〇〇〇年に朝鮮戦争の史料を分析したアジア学者のトルクノフの著作をご紹介されたことがきっかけでアジア冷戦研究を本格的に始められました。紙幅の制約から詳しくは述べませんが、ご高著『アジア冷戦史』、『モスクワと金日成』、そして『日本冷戦史』の再びの「三部作」は、このころのご研究の結晶であられます。

そして法政大学ご在職の最後の頃となる二〇一七年に、前述の修士論文を大幅に補筆された『神と革命』を完成、ご公刊されるに至っておられます。

ご定年後の今後も、ソ連史研究、ロシア学、アジア学についてのみならず、多角的見地からのご研究においてますますご活躍されるものと思います。かつての同僚の一人として、先生の益々のご健勝と一層のご活躍を念じてやみません。

先生の学内外での貢献に対して、法学部教授会は、ご退職直後の本二〇一九年度初頭に、先生を名誉教授に推薦することを決定し、大学よりその称号が授与されました。

後輩同僚である私の私的印象ではありますが、ここにぜひ、先生の気さくな、どなたからでも好かれるご性格についての小さなエピソードを記すことをお許しください。先生は、ソ連研究・ロシア学の世界的な権威であられるにもかかわらず、お話しするときは私のような若造に対してさえ常に謙虚であられました。法政大学は、少なくとも法学部では「辞令」交付などという「儀式」的なものは、私が就任した一九九六年の当初は存在すらせず、その後も堅苦しくは行わない自由闊達な場です。しかし、今年度、下斗米先生に名誉教授称号授与の証書を、今まで多くの先生がご希望されたように、郵送になさいますか、とお伺いした際に、教職のための特別科目のため本年度も特に週一度、本学において教鞭をとってくださっていた先生は、驚いたことに若輩の私が「法学部長」だからというだけで、私の

手ずからこの証書をお受け取りくださることを許してくださいました。あの日の先生の、いつもながらのにこやかな笑顔と、実は震える手で大先輩の世界的研究者に証書をお渡しさせていただいた自分のことは、私にとっての長年の法政大学での中でも、大切な思い出となることでしょう。

本誌は、下斗米伸夫先生の偉大な業績と活躍を讃えるとともに、法政大学、ことに法学部へのご尽力に対して、法学部教授会一同、深甚なる感謝の意を込めて先生に捧げるものです。